伊都岐嶋八景 中

へ 1
1300
2

嚴嶋ハ安藝洲佐伯郡の海乃中にありて。地の方を
去ること東西北の方さきハ四五里近きハ一里ばかり。
南乃方ハもろもろの周防伊豫の嶋々までも見ゆる也
一廻り七里ばかりの嶋にて。物みな岩をたゝへ谷ふかくしこめ。
松柏おほく生茂り。嶋嶺磯際ハ巌崎々にそびえて。濃くまでも
見えわたり。濱邊ハいづれも白砂。或ハ小石にて泥土もなく
藻屑もなし。松ハ女松多く。葉ハ藍よりも
青く。木ハ丹塗のごとし。正直なるも。屈曲なるも。その
ほとりなる。風景ありさまいはん方なき花の景色也

金澤文庫
門 へ 1 1300 巻 2

乃みどり月の夕露しくれ霜雪とふり紛四乱
折しれ来しきまても。はきやれならめまそ侍らはゞ
なる妙手毫を染るとも。えやはおよばん。さゞ多
詩山の美景ところ〳〵に口ずさみ侍らんハ中〳〵
浅くそ侍らん。近代本朝の禅師。此所に皆
下の故国の西湖洞庭の佳景ふも。おさ〳〵
おとるまじきよし称美し多かく称せらる。
宜なるかな奥乃松嶋。丹後乃はしたて。
此乃ハはきし歳ハ。日本乃三絶景ならんと

いつくしまとふハ。市杵嶋姫命をまつりしお
が地なる故なり。厳嶋大明神と申奉るなり。いちき
しまハ音のかよへるより又此伊都神の宮地なるが
故宮嶋とも云り。齋ひ奉る所の伊都神。御本社ハ
天照太神のあれましまし給ふ三女神なり。三女神と申
奉るハ。市杵嶋姫命。田心姫命。湍津嶋姫命
なり。相殿に國常立尊。天照皇太神。素盞嗚
尊をまつり奉る。客人宮ハ素盞嗚尊乃あま
まつ五男神なり。五男神と申奉るハ。正哉吾

勝々速日天忍穂耳尊。天穂日命。天津彦根命。活津彦根命。熊野櫲樟日命なり。日本紀ニ云以テ日ノ神ノ所生三女神者使ヒ降居葦原中國之宇佐嶋矣今在ニ海北道中ニ號曰ニ道主貴ト所ノ謂今海の北乃道の中にましますといふは蓋嚴島に御鎮座の事なるべし。延喜式神名式に安藝國佐伯郡伊都岐嶋神社とある是なり。始めは豊前國宇佐社に降臨し給ひ。後より天下二所宗廟。石清水の社にては姫太神と齋れさせ給ひて。八幡宮と和光乃御かげを世に照しまします。

識に皇太神一躰分身の御神。かけまくもかしこく。此嶋に御かげをうつされ。皇統鎮護の霊神にして。國家安全夜守り日の護りとなりたまふが故。朝廷祭祀の官社となり。世々崇重して。あつく常典の禮をそなへ給ふ（祭祀の事延喜式公槐記百錬抄拾芥抄等に委く記せり）仁安治承の間。後白河法皇。高倉上皇遠くも此嶋に御幸なりせ給ひ。神徳を仰ぎましまし給ふ。世々の公卿武将も。多く詣でたまひし事。古き文どもに書載侍る。志るのみならず。廣き御めぐみ普く民俗にまで施させおはしませば故。

上中下のへだてもなく。志の誠をいたすときんば。
かならず冥助を施し給ふ事いちじるく侍る。寔なり
ありがたくかたじけなさ。何ぞ筆舌にておよび
侍らん。只信をとるべきなり。御本社は戌亥の
方にむかひ給ひ。御池のうちに立せ給ふ。桁行八丈
餘。梁行四丈餘の寳殿なり。客人宮は未申の方
にむかひ給ひて。これも御池のうちに立せ給ふ。桁
行五丈餘梁行三丈餘の寳殿なり。大鳥居高 八間半余
笠木長 十一間余 額 長八尺五寸 横七尺六寸 表 嚴嶋大明神 裏 伊都岐嶋大明神 後奈良院御宸翰

御本社の正面海の中にたてり。本社をはじめ
幣殿。拜殿。祓殿。廻廊等をならべてはくあり
高舞臺 伶人の舞臺なり 平舞臺。左右楽屋。門客
人宮なとは御社頭の前にあり。平舞臺といふは
御本社の前の祓殿廻廊より造り出して。楽屋門
客人の宮まで連り続ける板敷なり。此板敷百
八十坪余海の上へ張渡し。石を柱に立り。屋根
なし。此板敷より幅二丈ばかり長さ十丈ばかり沖の
方へ造り出して舌先といふ。御本社の正面なり。御

社頭の色紙座。粥座。湯立殿。御供座。愛染堂
撲経蔵。経舞臺あて座屋数く多し
惣して境中上と山下にあるゆり。摂社(せつしや)末社并
堂塔数百ヶ所あるを支えて地方にも数くあり社家
供僧回侍并諸役神人都合て数百人ありて御本社
より始め末社等年中祭奠(さいてん)の行事を執行なる。年
中に行事数く多し。其事にあづかる人はおほくんば委記するにいとまなし
先年風早宰相公長卿ありし中にもたまふる事をこひ
まで。厳島八景の歌を冷泉黄門為綱卿にこひ

中四

給ひ。王卿雲客の諸家へまうし配りて。詩歌を勧進
したまひしに。各よろこびて御筆を染られ。詩歌二巻
奉調ひぬ。これを予(やつがれ)よろこびてかたじけなくも
大明神の珍乃寶前に奉納せさしめそのうへにかけ
まくもかしこき神の意(こゝろ)にも。かくあふげる言の葉は
玉は。やはらぐるひかりをそへ。ちゞに納受した
まふらめとありがたくもおぼえ侍る。抑八景題目の
厳島明燈といへるは。御本社。客人社。両宮殿へ
連り続ける廻廊百八間あり。間ごとに鉄燈籠(かなとうろう)を

錺りて燈明を掛く。則百八燈なり。其外御内陣
外陣常燈常夜燈数多し。厳浄明燈といふ
はこれなり。總じて潮の満る時は。鳥居洲。神前
御池の内。御社頭の縁までも潮こみて。楼臺を
全く潮の中にたてて浮るがごとくなり。かくあるときは
廻廊の往来もされば海の面をあゆむ足のりしな
ひれぬる鱗の数さへ見ゆるばかり。御燈のかげ潮にうつり
てそのえもいはれぬ美しき識。竜の都。仙乃洞を
かくるならんやとおもひける

大元櫻花　大元の社は御本社より坤の方にあたりて
浪高くはあり。是當社乃摂社にて。ゆゑある御社なりと
いへり。御社頭のあたり浪色桜花多し。惣じて
嶋山乃内桜花多しといへども。此大元乃花はすぐれて色
香勝れたるよしいへり。花盛りなる時は。倩來る諸人
も。そのほどよかなる花の白ゆふを手向ともし。あるは
木の下に千代の日乃暮るゝ紙ともし。沖こぐ船も色が
てなるをと見。磯菜摘む賤めが袖も。そのづから
かをりつらんとぞゆかし。

瀧宮水螢　滝宮ハ御本社より巳午の方にあたりて
橋の上ハ参道の邊なり。是又當社乃摂社にてゆへある
御社にして御社乃後の方の山より漲る水白糸
を乱せるがごとし。ふるへ高倉上皇御幸記云三月廿
七日滝宮へ參り給ふ拵なきに公顕僧正府詣てなる
雲井より落来る滝の白糸にちぎりをむすびてぞ嬉しき
竹内御門主詣てさる御詠にて
山高みのぼれぬのぼる岩ほよりおちくる白糸の瀧
はるばるとのぼりてきたる水石の。気色言語に絶し。流もいさぎよく
涼し。夏ハ雪くに螢多く飛かふあたりは滝乃白玉が
まがひあるハ御燈の光をそへ。川邊にそひて流るる
ほたるをも。あるは社頭のかかるれは。軽羅乃小扇
もてうつ人もありし
鏡池秋月　鏡池といふハ客人宮のたれ方。朝倉屋
乃前にあり。夫妙集云大聖院僧正良政發句下
遠にて十三日一會當社にて鏡池といふあれハ
かげうつす月やかがみ乃池の水
すみまさりける秋の夜乃月。くまなき鏡池に氣と

とんで。天水相連同一色更無纖翳隔清光と
はく詩のかゝるも此所のけしきにぞ有ける

谷原麋鹿　谷原ハ御社頭乃東方。南町の奥乃山の間なり。當嶋には鹿多く。浦く山く社頭の邊。民家乃間にも住て。人に馴て物ほしけに來れり。毛色も他所よりハ勝れていとうつくし。谷原乃邊とり分け多く住めり。紅葉を踏分てハ秋のかなしき紙はつ萩を志からみ妻恋ふ声ハ夜となくひるとなく宇はいてあはれ秘ぬべし

御笠濱鋪雪　御笠濱とハ御社頭の邊大鳥居乃あたりをいふ。御笠濱といへる潮ハ千ゝ乃にハさ半洲となれる故右の洲をもつて雪の浮ゝる朝。夕の景きれいの松の梢枝の葉には頃刻の花をはらひ。打よする浪の色も洲濱にまがふさまなり。一般に白く白をもて誠に粧成銀世界布寶玉江山といへる風情にぞ侍る

有浦客船　有浦ハ東町の人家。脈小路牛王前町などいふ處をさしてありけるといふ高倉

上皇御幸記云三月廿八日還幸の御舟にて成
つる。内侍とも汀に出て何となく日比の名残を
のび思ひける気色なり。名残多きよしの哥つかふ
まつり侍とみえしかは
立帰り名残も有の浦なれは神もめぐみをかくる白浪
風も吹つゞみ物のあはれもまさりてなりける。おもひ
くだけぬ海のうへに。桜のちりかふさまなども。あはれみ
しくおもしろくかなしくて三月盡にめぐりあひける
大小ならぬ家僧の沙汰人まかりあへる。又右廻國

遠境の貴賣交易の高船いづれも皆此浦に
停泊せずなり。櫓聲頻に漕出れば帆影やゝて走ゆく。
客舟數艘泊まる時あり。東語西語憂喜をあつむる
さまぐなる事にぞ侍る
弥山神鴉　弥山は嶋中にて最高き峯なり。
麓より廿町ばかりの険路をのぼる。屈曲なる道なが
ら松杉など生茂り。巌峨たる岩滝多く。水清き
流あり。山上より四方の見わたし又なき風景なるを。
そのかみ弘法大師求聞持修行ありしより今に

なく其修法断る事なく。開持の火今につゞけハ秘
密。山中堂社五十ケ所余ありていと殊勝なる霊山
なり。神鴉とハ昔大明神當島御鎮座の時。
五島といへる霊島御部曲に仕へき。其霊島のともから
年々相續して今も霊島一雙此山にあり。是を
神鴉といふ。総じて鴉乃凡ありて幾千万といふこと
なし。其鴉ども此霊島雌雄一双ハ神威妙なる
類を離き群を抜て。余の鳥近付事あたハず
五島のともから年々お換とる事諸人まのあたりみるところなれハ実にあるきとを
御鴉廻りとて此鴉

嶋をめぐりて。七浦にいます御社を拝しなする事
あり。めぐるハ祈願乃子細ありてめぐる所もあり。又講
ともがらにて年々廻るもあり 鴉廻りをせするに宮仕 武所とみなそろへてまうき
りゆへに宮に ちろさを 七浦の内第五乃拝所を養父崎といふ。
此所にて鳥喰飯を上るといふ事あり。鳥喰飯とハ
粢をこしら折敷に盛り幣を切かけたる物なり。
其日の御師の船をかけるの沖中に漕出て。太の
鳥喰飯折敷を海上にうかべて楽を奏を餘
山の岸より此沖まてハ二里ばかりもありへきなり

霊鳥一雙ひ弥山の嶺より翅をならべて飛来り。
松のしげみをかすめ浦師の船にのりうつり浪の上
にうかぶ時鳥喰飯を先雄がもてあげる時。船中
踪なるも先なるも数をと上総をゐれて巾鳥を
ゑやと。次り又雌が其飛来り家あのがくあく
ふ時。船ハやましにいさみぞよろけども。中々懼るゝ
事しきりに浪に又雄がまた飛来りておくる。凡三六
をとりて三度にわたるなりされは浪あらく一日に五
艘七艘あまた附は十艘にあまり幾とも。障なき船

ともハ其数く鳥喰飯あるべしといへども手なれし。かく
ある中にも安芸稼にきてまかれハ霊鳥出る
事なし。ゆへに出ぐく浦師の船にのり移りても鳥
喰飯をあげども。その時は浦師乃船とも飯を
乃舟をも踪の浦まで漕戻し。船中をあらため
穢くに汎を。おしも穢ある人をば船よりおろし
踪の濱に残し置。そのうち船中修禊してあらた
なり鳥喰飯を海にまうくれハさうなくはつる
なり。そのあやしく妙なる事言語筆舌におよぶ

事にあらず。此奇瑞(きずい)ありける故浮島とハいへば其主を
はじめ宿主親子どもに至る迄。皆むかしより清
くきよかりけり。弥山にても毎朔供物あり。
但し山下に浮屋ありける日ハ弥山の供物ハあがらず。
弥山ハ朝より浮島ハ午の刻ばかりに。あらはれし先
其瑞ある事不思議といふも称賛あるべしや。
總して浮乃内にかくよせしあれば清浄にて。元慶かん
得なりける。つきぬる物なくいでこし。是皆大明
神のうかれ御めぐみのさかりしおぼしけるならんと。

見侍りし者の録いたるのミ
あはれ人厳島八景詩歌を。梓よりちりばめん事を
かきあつめのはかりて。八乃題の趣を書きしるしてよと
すゝめらるゝ。おなじく義景勝境くハしく書紙を纔
しそれ。つゞりみしりぬ筆のおもむきもなく我やゐとく
しめりん。今いさゝか其おもむきをあらはして。他乃
霧をつきて。且いハまさりたんねるさらの人へしるし。地を
饒くこれをつくしむをおとさしめんたよりともも
なりはりしか。腐毫にかなひ侍るものなるし

嚴嶋明燈

宮嶋や文字ちらく塩みちて波のうへてらす灯

比叡山成等院　僧正尊俊

波ととなえて救ふる灯は宮居をもしるしは久しき山

京師梅月堂　沙門宣阿

沖津の神乃みなもとなりひてやむかしよりかくててらす燈

藝州廣嶋　浅野和通

同　岡本貞喬
我君の御代まもる世の光とて宮居照してゆく灯

同　大嶋氏　龜子
跡たれし此宮嶋の神ならす内外厚くて照らす火

雲州松江　乙部可寛
宮嶋の神のめくみも海境に見えて数そふ石のともし火

同　香澤弌玄
阿さ□き数を波に宮嶋に絶はせぬ神の燈

備後尾道　沙門恵寂
三川瀬に数しうつれは海奥の数さへ見ゆる宮の灯

同　富嶋昭亘
たえもせぬ神のちかひも見えて此汐路に浮る宮の燈

洛北大原　尼志計
宵〳〵に数も千路の沖かけて波に浮る宮の灯

同　尼智詮
ともし火の数をうつして宮嶋のともしを波にうかふ数々

防州　秋本亮吟

まもるとて数うつしていはくし海たそかれも波の神の灯

藝州竹原　僧　恵應

盛りしあかりの影ならぶ燈籠波まよう汐る宮のともし火

同　鹽谷貞敏

和田津海のたつの都と三河汐よりも数かくなる宮のともし火

廣嶋　村上政休

波路まようつる風しるれる灯もちや風つけける光とそこえん

同　松井和遥

やししあかりの数をたれと思ふし津々島わたる宮の燈

可部　木原通俱

いつくしま海林のひかりも照をうつしてたゆたふ波のとも火

厳嶋　西原政珎

神代より世々の城主の海の宮乃灯影もてらりそ嫁

厳嶋祠官祝師　佐伯久寛

三河瀬の波乃下る灯影新さ志河の神の宮居ゝ

[illegible]

同社大宮棚守 佐伯元賢

黄檗萬福禪寺 悅峯和尚

百尺殿樓海氣寒
却疑星斗落欄干
好山朶々鏡中看
夜有神燈光映浪

肥前州長崎 僧 謙光

窈糾繚迴千歩廊
寒潭影映簇星光
龍宮欝起水中央
一歩一燈々幾點

攝津州 僧 獨麟

紅燈百八點長廊
鴉定鶴棲歛夕陽

夜潮推遷万波色
天女分来無盡光

藝州廣嶋　小鷹狩元方

夜色沈々水府空
社頭爀灼一燈火
飛甍重閣鎖雄風
惣入神人和気中

遠陽　僧　瞎雲

歸禽落日寓雲中
長廊百八燈華燦
仙薬声飄逐晩風
影射魚龍海上紅

肥前長崎　田邉方業

長廊盤繞海瀾通
百八明燈輝上下
離殿影涵銀浪中
霊光夜々照龍宮

藝州廣嶋　梅蘭正珉

殿廊海気蒸燦々百挙燈影落魚龍躍光
浮雲霧凝旅舟霄不惑仙掌露須兼報
人間喜永令神徳興

同　竹原　唐彦明

山陽開巨鎮海北負佳名霊閣欝相望華

燈幾筒明煌々標緲戸灼々點雕甍媚水
寒光散罩汀瑞彩横鮫人非泣玉僊女豈
遺瓊波動燃帆影夜開照櫂声鼇掀孤柱
聳鯨走太潮平不見蛋精滅祇任龍領驚
高低分若木遠近辨蓬瀛翻怪乗槎客直
淩牛斗行

大元櫻花

むかしみる人やまつ家に植をえて櫻を志けき大もとの宮

沙門宣阿

八重一重神の社に咲つゝく子なに花もみすふ春風

藝州廣嶋 大久保忠孝

春に今咲や色香も大もとの神代乃花の種おりなん

嚴嶋社士 田 忠栄

同　三浦元敏

たくひなき恵ミ尊し太元の宮ゐにさける花乃めくミを思ふ

廣嶋　大嶋正信

いつまても神そうけなん太元のまへにさかなむ花の白ゆふ

沙門恵寂

いく春も末もかはらし太元の神乃恵める宮のさくら花

洛北大原寂光院主　尼智法

千早ふる神代の春も太元の此桜乃花の陰にみえて世

雲州佐陀　朝山芳房

世にしらむ春の浪根に咲花も雲わけ見よ神の桜は

坊州岩國　足立慶専

うちよする春も浦浪白妙に咲やにほへるもの神の宮

冨嶋昭亘

これなるは神の恵の花もさかへけて幾世の春にほはん

肥前長崎　髙原道羽

よる浪の花も備へる太元の桜にゆかる神のこゝろか花

神垣の桜に流るゝ注連縄なかりき日わか須ゞる旅人

竹原 道工彦文

瑞籬の春ゆくに咲花のちるをも神はぬさとうくらん

同 吉井豊庸

いかばかり神も桜をおほすらむその神垣に咲にほふらん

同 高橋氏 伊和女

みかはうきの門にも志をさく桜木のさかへつゝ花を盛なりき

同 塩谷貞敏

掛てしもぬさとたむけん神垣に咲はめぬ花のあらしさと

廣嶋 小川親之

宮人のゆふさしはさむ枝まても桜にかはる花の大元

同 清水氏 芳房

神垣のしらぬめにみるなみの海の名ありまゐらぬ花のにほふ

浪花隠士 梅江軒知足

僧 獨麟
檜杉深擁大元宮 櫻樹花開白間紅
十倍春城絲管響 鶯声宛轉錦雲中
黄檗漢松院 僧 岱峰
何年移植漢家種 凝雪興雲萬樹奇
果熟廟前吾要用 黄鶯他日莫相窺
京師 北村可昌
社下白櫻交影深 濃雲淡靄共森々

三春花事無多日 坐愛千金一刻陰
田邊方業
是雪是雲千簇堆 瓊葩璀璨廟前開
紅裙醉殺遊春客 歌吹花陰亡却回
藝州廣島 寺尾由順
白櫻花發社前春 自以靚粧供古神
雨々風々奇絕處 料知妙手畫難真

遅日大元古廟前
風流多少遊春容

遠陽　僧　曙雲

櫻花萬樹映雲鮮
誰賦郢中白雪篇

廣嶌　梅園正珉

大元千古色春車不相違濃豔燃滄浪芳姸鬟翠微露浮黃鳥濕風起白鷗飛多少奉祠客賞心未肯歸

瀧宮水螢

愛宕山大善院　權大僧都惠運

瀧の糸はぬきもとめ須玉うきの寄る波と見て行て螢飛ふ

梅月堂　宣阿

瀧津流と永く清ける此宮のまへて涼しさ渡る神のみつかき

嚴嶌祠官　田幸榮

宮人のかさしの玉かとみれはぬく瀧の水のほたる

同　田久道

飛ほとるひゞきをいて玉ちる滝の岩波のしぶく

同　熊野行廣

落滝はきされ文庫を最ひる玉と咲さむく水のほとるを

岡本貞喬

宵くに文かをはして滝は流の玉ともなし螢こと成

藝州廣嶋　寺西常之

滝はしなきちらぬる文庫の灯をちかきをかきそほとる飛新

豫州今治　僧都珠峯

涼しさは海裾く玉ちる宮の名札滝は岩ねをてらし螢

同　完耳光似

むすぶ玉のしらずとも見え源自然の滝乃文ねとてし玉螢

雲州松江　僧釣月

宮の名札滝のきて京よろしかゝるみさるゝ流の涼しさ

同　乙部可寛

飛ほとる新しもなかれはせきこぞて落るや滝の宮の涼しさ

同

岩波の声とさへ涼しさや滝の宮居をまて蛍火

永岡久宜

豫州松山

風のみか流れにそれや緑宮の落来る水は涼しき飛む

仙波盛全

神垣にまちかく落る滝の糸絶ぬ間よりも蛍飛しけり

足立慶專

此宮の滝は岩根に飛蛍秋はさすかにちるこそ波

大嶋氏

龜子

瑞籬しまとく蛍火光涼しさ波ねく滝のしら玉

冨嶋昭亘

宮の名も緑の白玉と見合ても涼しく飛蛍の声

僧 惠寂

白玉の風にみだれる落滝はよるの光にまよふ蛍ハ

鹽谷貞敏

ほとりまて玉とちりゆく石はしる滝の光とともに飛ぶ

高橋氏

伊和女

洛北大原 尼 淳正

星ならはなみにひかりや此宮の瀧波をさくゆかる螢ハ

可部 吉村昌房

涼しさや岸ちかき宮の瀧黒糸のしけハ螢のてらすひかりも

西原政珎

宮の前瀧の白糸をみたしさへ玉と見えて螢飛かふ

梅江軒知足

木陰かれちりくる瀧の音して玉をみれはほたるとふ神垣

靈祠夜靜氣如秋
因憶古人求數斛
澗陰古廟倚葱籠
晩映水簾螢火影
天女嶋中暮靄連

黄檗法林院 僧 郎中

熠燿群飛燦急流
光編岩谷樂優遊

僧 獨麟

自是幽人避暑宮
輕和濺沫逐微風

藝州廣嶋 森嶌勝延

瀧宮高處掛飛泉

勿溪幽覧霄行影
想見神光照寂然
僧　瞻雲

路遠羊腸山更幽
瀑泉嫋嫋掛岩頭
祠前夜静飛螢亂
疑是銀河星彩流
田邉方業

瀑泉繚亂翠巖傍
古殿風生六月涼
飛去飛來螢火影
水晶簾外點星光
梅園正珉

勝境瑞雲浮夕螢叜幽玉兼飛瀑散星
任卞風流隂翳明還滅靈壇去或留冥捜
詩料足囊裏不須収

鏡池秋月

こゝろしづかなるひかりも雲なき鏡の池にさやる月影

梅日堂
宣阿

名もきよくうつして飛鳥ゝかゝる鏡の池の秋の夜の月

岡本貞喬

くもりなく月をうつして浪清き鏡の池や影かゝるらし

藝州廣島
近藤久正

うきくもゝ浪もてるひかり秋風のふかく鏡なる池の月かな

田幸栄

秋よりも水は鏡の池なれや色をとゝめてみる月の影

嚴嶌社士
佐伯久元

幾秋かふる見の池なるよう浪や月の影はくもらで

雲州松江
山中章弘

曇りなき水の鏡の池の色て幾世かみらく月の影けり

同
乚部可寛

よしあしの花の月ならし鏡の池にかゝやきてもしる

肥前長崎 吉川雅珍

いく秋の鏡の曇らぬ影ならしてりそふ月も波をさゝぬ池

完日光权

秋の月てりそふ影や池の面影ますかゝみをみかきかけれ

巖寫 青木久行

秋の夜の影をうつして池の名も鏡に月や澄渡るらむ

道工炭文

秋てらす月も波をも鏡てふ池の名やかくれなくてらす

吉井豊庸

名にしおふかゝみの池の底までもてらしてぞ見る秋の月影

高橋氏 伊和女

人心照さるゝや秋の月かゝみの池に影うつります

廣寫 喜好

照る影は空も月に波をうつしかゝみの池をますかゝみなる

同 黒川貞政

同

秋風にみるかゝみの池の名やうつゝめくもらぬ浪乃月哉

松井和遥

同

流よる水かゝみの池照る名も見えてそ澄る秋の夜の月

村上政休

同

曇なき鏡の池の水の面に歎流るゝ秋の夜の月

清隆

同

さやかなる影そ照りて池水の鏡にうつる秋の夜の月

冨島嘉禰

洛下称名院主

祥麟和尚

はやりにし雁の晴るゝそらの雲むすふ鏡の池乃月かそ

僧 獨麟

一泓寒碧停霊祠
最是清秋明月夜
浄似菱花可鑑眉
其如漢帝影娥池

僧 瞻雲

清秋月満鏡宮池
假使蟾宮蔵蹟去
古殿深沉夜色奇
分明照見玉娥姿

七里嶋風仙境清
秋天夜々白雲散
海水通池鏡面開
最憐静夜姮娥月
古池一鑑開又有月明来露気團秋色水

黄檗紫雲院 僧 香堂
十分心鏡線池平
曖見觸波碎月明

京師 山本元貞
秋光一碧絶煙埃
臨照盈々移影來

梅園正珉

心照却灰簪牙祥鳳下廊影臥龍田遠容
不堪向應羞霜鬢催
皎潔銀盤映鏡池
風雲莫使蛟龍起
廟外秋池鏡面開
夜深因醮青霄月

田邉方業
寒光相照碧琉璃
清意一般此夜知

藝州廣島 伊坂正周
海風淨掃點無埃
恰似龍珠捧出來

谷原麋鹿

夕暮は鹿なきそふる谷川のなかれてちかき秋の山風

梅月堂
宣阿

秋萩もいろにかはらし谷川のなかれて妻をしたふ小男鹿のなく

嚴嶌社士
飯田勝行

しからみは流まつ鹿や谷川のきしにや招きよせなん

僧素洲

なかきよはなやらむ谷原ふりて男鹿なく也

洛北賀茂
岡本保助

咲萩の花ちると聞て谷川の原に妻こふ声やあはてたか鹿

完甘光似

谷原に小笹の露の打そよくしも秋やたえす鹿のなく声

僧都珠峰

谷川のなかれと共に萩は露しつもみちさそふ流に小鹿鳴なり

雲州松江
関戸俊胤

大原　尼智法

風わりても稀ぬる簾も秋来ぬと流れにつきぬ妻こふる鹿

同　尼智聞

よひくに妻こひ侘て岩かねにおりも来ぬ秋乃小男鹿

大鴻氏　亀子

やかてまつ萩か花妻に鳴鹿も家に出てや流す声

厳嶋　青木久雄

秋来ておきし浅茅の露の宿かりに妻おもひ侘く鹿や鳴らん

防州岩國　粟屋氏　好子

吹おろす嶺の嵐やわたるらむ風にもみち氣あふの棹鹿の声

同　森脇江月

百舌鳴梢にかけりし鳴や岩かねの秋にならぬる小男鹿の声

同　足立慶専

浦人もかりそめやさく岩かね松吹風のさそふ鹿の音

秋本亮哻

やまかけて尾花の袖に恨みてや鹿もほかに出く妻や恋らむ

冨嶋昭亘

春をゆく浜荻の葉の音に聞なれぬ嵐哉

僧恵應

風の音も松の嵐にそれしらて枝にかゝれる雪をしらぬね

梅江軒知足

鳴鹿やかりいね田やかて京に出る妻をしのふの声

嚴島社祠官上卿
佐伯守行

百重なるいはほのおもに秋さる小男鹿の声

原上産来毛正鮮
見人不怖心能狎
尋藥啣花靈地毛
呼群只要遊仙境

黄檗宝藏院
僧恭堂

啣々呼友下江邉
堪愛亦尋莎艸眠

田邉方業

斑毛濯々是神恩
進着人間豈駭奔

雨餘芳艸滿原春
麋鹿知無羅網患

豐艸茂林地自幽
慣看來客能相押

街頭祠畔或沙濱

藝州廣嶌　寺田高通

水緑沙明境自真
呦々不敢避遊人

僧　獨麟

引群仙鹿足優遊
不識狐裘弦矢憂

僧　瞎雲

引侶徘徊不畏人

日暮歸来林麓裡
呦々相喚復相親

梅園正珉

濯々山原鹿呦々日夕佳頼無周主逐莫
使鄭人埋時出遊街市相呼儔石崖性間
又多壽知有帯銅牌

御笠濱鋪雪

いつくしの神もみかさの濱松に降る雪のとをくなかるゝ白雪

梅月堂　宣阿

ゆふ日さす御笠の浦の松枝に幾代へをしく雪の白妙

藝州廣嶌　落合兼雄

浦波のよるとしもなきや濱志浦のみかさの濱の雪のしら浪

嚴嶌　里村久慶

打よする浪ともみえし白妙にみかさの浦の雪の朝風

森脇江月

さゆる夜はむらくもとそ見て浦浪の雪の衣とみかさの濱松原

粟屋氏　好子

かくも岸にもみえてそおくり縁もたえしてみかさの濱の雪の明方

秋本亮吟

ゆふ日かけはくらしの風もたかくて浦の名のみ笠にかゝる雪の白雪

洛下　萩田孝延

雲州松江　鈴岡恭寛

浦風に堀りう込んたる花ことも高砂の浜乃雪思ひなかの

同　僧釣月

大君の高砂乃浜に世にふりしみゆきの跡とハ今も残れる

僧都珠峰

志のそゝ春に帰りし江の雪を今あらたに見る高砂の浜の松

嚴嶌　永田政伸

千代かけて治る高砂の浜乃名も帰り絶る書は松の記

道工彦文

故郷の人母かたらんおりつもる雪成ことき花の浪ほて

塩谷貞敏

残木とゆるやこちき此浜つる流にのる浪雪に消えたり

吉井豊庸

春帰し程の雨も消さなん高砂の浜乃雪れいまほの

肥前長崎　河本正豪

乙女子のかさく高砂の浜さよもぬりしく雪れ袖の白妙

廣嶌 小川親之

きくよりハ見るハわきてぞ宮嶋のこれぞ浜の奇観その

同 喜田村成儀

浜ちかう雪の浦山清ミ見れとゆきてみちきの東海の白雪

村上政休

汐風よりも波も見るも夏はさむきこゝろのそ海乃白雪

冨嶋邦好

海とほく行て月影さし出る浜の奇観その人

洛下 祥麟和尚

浪よりては月もまたなる風も落葉もみちきの浜乃白雪

愛宕山圓覺院 大僧都泰和

風颯松韻掃心塵
撩乱芦花都壁倒
海鳥寒雲灑六花
北風吹下一行雁

天女婆娑御笠濱
汀洲白様一般新

僧 獨麟

長汀十里没平沙
白紙分明墨点斜

僧　瞎雲

玄雲黯澹雪氊毸
潮落沙汀銀界開
似是山陰乗興客
扁舟截浪草津來

黄檗龍興院僧　百泉

風務飛花堆笠濵
漁夫轉棹却迷津
雲林煙鳴渾同色
更訝波神撒玉塵

田邉方業

奔濤捲雪海風凛
想得扁舟月夜深
埋没千峰銀一抹
不知何處問山陰

藝州廣嶌　渡部真知

映宮鋪雪海門西
色々射眸望欲迷
鶴處影寒花表外
不妨碧浪捲銀泥

梅園正珉

凍雲御笠濵平地忽鋪銀灞上題詩客山陰乗興人一簑千頃浪萬樹满林春先見豊登瑞謡歌處々民

有浦客船

急かでよ沖より舟のよる浪は神に祈りをかけての浦浪
梅月堂 宣阿

世渡るひくのいとまこそやすき舟もあらふわかれなるらみ
巌嶌柱 里村久豊

むかひくるあともみえぬ有浦風をまねけちかく流るゝ友舟
田 幸栄

今日いくら浦々あまたかさなれはゆくへも遠き有浦の舟
京師 桑門似雲

あらはるゝ岸よりかゝる有浦風よかへる心やさそふ舟人
大嶋正信

うかしもあへぬ海の客舟ハかゝるあらしや有浦浪
雲州松江 大野真敏

いく世をか経にしみなとゝ有浦にみえてしちくる波の百舟
僧 釣月

完甘光似

いたく海沖かけて船も見えそめて見ゆる是也有の浦よ浪ん

粟屋氏　好子

よひ今もいかなる名や有らし汐も来ぬ流るゝ舟を浮ぶ

秋本亮吟

時とて須磨の船も流し寄せ来る神まち路やひらの浦なみ

城州八幡　橋本重徳

日暮れて沖の海のさゝやかに浦の湊を百まつとふ出船入舟

吉井豊庸

夫帆むきて出る船も今見えとなりや有礒浦の追風

高橋氏　伊和女

見る内に出るもひらの浦浪のよせくる船の数もしられぬ

僧　恵應

宿るまとも久しき泊り船あかぬ姿や有礒浦浪

巖嶌　佐伯喜垂

とり来るいく里船を志るべの世渡る哉や有礒浦まで

廣嶌　本村方武

舩子ゑ舩あを帆あはせて寄られは出るもひらの浦の友舟

村上政休

よりあふも世の共もひらの浦なみやこゝろあまさ浪ふ舩の数〻

佐伯林久

幸近ゆき帆むき流して釣舟もまたにほやひらのうら浪

冨嶋邦好

けふのちからもひらの浦をこにてむかふも出る舩そ浪そふ

西原政珎

漕返し出れは座そてらる舩もありて浦まて舩子ゑ舩よ

梅江軒知足

たゆたはなさきやれも百舩も千ふねもおほにしほの浦浪

梅園正珉

片帆西又東晩入碧灣中幽渚一痕月寒潮萬里風越商通賤貨楚客任萍蓬孤嶼豐饒地四時樂不窮

僧獨麟

群帆落日向仙山繋纜翠巌碧石灣
借問東西南北客夢魂應不到人間

僧瞻雲

古岸候風賈客舟呉歌已曲度鷗洲
不知逢夜蓬窓夢魂與月明到幾州

黄檗天真院 僧仁峰

有浦風光何所有晩來唯見旅人船
定知吟得張公句猶聽鐘声半夜天

肥前長崎 村岡重德

幾多帆影落江潯山麗水鮮繋客心
一夜悠揚蓬嶌夢夢魂直與月浮沈

千竿檣影側汊頭
南北東西萍水客
緑楊春水白鷗汀
應是夜來蓬底雨
江上烟霞知幾舩

田邉方業

蓬底相逢共話愁
歸心一片逐江流

藝州廣嶌 太田正章

此地客舟幾度經
故園草入夢中青

梶野宣堅

東音西語暗相連

躊躇不啻為風浪
因憶高房留別篇

彌山神鴉

浮かゝる小聲神も紛ひく山ゝ浪や波よ拾ふまれ

梅月堂 宣阿

神やしろ建し昔をむかしより鳩ぞ飛くるかたをあるらん

岡本貞喬

幾千世の宮居にちかき此山乃林のからす若ても帰りやらね

大嶌正信

松に咲花も心やあるみ山ゝ波法にのつくさ子世ぞうきねて

僧都珠峰

奥ぬかにみかくまて鳴うゝ波引てや神の恵をもしろ

森脇江月

神代らはらんのからの波此山の春れし梢ハえしもやゑ

道工彦文

波らん絶ゑや浪ゝゐのゆなきて世にたえうらみの峯

僧 惠應

雲州松江 熊谷時孝

世にひろき姫の大神の宮居こそ名におふなる本山のうへ

同 乙部可寛

流れ入るみすゞ此山てふ中からも神の恵はたえぬ宮居なり

佐伯林久

涼しさは峯にさやける神垣よなみ島に幾代色ぬらん

富嶌喜禕

此山の神かしこさにおきまつるかぜふきはらふ雲もなかりし

勢州山田 僧玄心

雲分る峯にあらはれ給ふ姫きみの川の流の末もたえせぬ

西原政琳

いやまして此山高く今も猶神の恵みと見ゆるうれしさ

嚴嶌社祠官上卿 佐伯親盈

曇なき日影の光をおふ山のうへまでてらし筆に繪の事

同社大宮棚守 佐伯元敎

いにしへの神のめぐみは此山に顕てかゝる光見えけん

山靈高占碧崔嵬
設供舟中吹玉笛
崢嶸靈嶽瑞煙霏
蘋藻巧啣斜日外

千仭山兮萬頃滄
過舟笛東泛粢器
一峯螺髻渺茫中
又有神鴉能報吉
玆高欝聳海中天

僧 獨麟

千歳祐民最異哉
一雙玄羽出雲來

黄檗壽泉院 僧 日峰

遥見黒衣下翠微
翩々時掠客船歸

藝州廣嶋 田中忠

弥峰奇絶甲扶桑
怪見神鴉降峽岡

京師 伊藤長胤

老樹周遭天女宮
舟行長去來風

僧 瞎雲

神鳥雙棲知幾年

華鼯有時鳴賽鼓　排雲御供去翩々

田邊方業

絶頂棲鴉不作群　尋常豈到碧潭瀆
樓船遥設賽恩奠　飛下御供凌紫氛

梅園正珉

弥嶺自岩嵬靈鴉栖密條衝嵐雙袖冷遠
鳴小舟遥聞笛山頭下含渓波上飄神仙
元所芰去欲問松喬

手向振袖ひらく路をそなへまして凡のかずかくしさあ
藝の嚴島八日市此嶋かけて洞庭の佳景ともなく
おもしろきさまくん彼鴉の米を咄きいへる大江匡房
大宮人と勧めまつり八の方の題をもおもひて詠歌も甚
ゝ感じていつまでも御神楽深く集めて納め奉りしめたまふ
けるよりも前よりも上の句を勧めまゐらせて見ん
ねぎらひの事なる者は遥にかけて　神の廣前に捧
なる事九のむとし

法橋昌純

嚴嶋明燈　波涼しともす神のひかり哉　法眼昌億

大元櫻花　人の種もつきぬ神代の櫻かな　法橋昌琢

瀧宮水螢　むすふ瀧の宮居に飛ほたるかな　柏亭直條

鏡池秋月　月さやか神の鏡と照池かな　杜多周旋

谷原麋鹿　思ひいる猪と鹿の音も谷原　沙門玄程

御笠濱鉢雪　いさ清しひかりみかさの濱乃雪　柏村真直

有浦客舩　舟はいかりおろすらん雲の海　里村昌頓

彌山神鴉　宮柱のまへはかゝる赤し春乃山　法橋昌純

藝州嚴嶋ハ西の海乃磯のうへにたてたひらし浪
世にきこえし靈地なり御社のまハりさうなり玉垣廻
廊ハ蒼海のうへにたてり又ハ山高く松杉とし形へる
出かくにして本源を隱かくし當初　神明の民祈りし
恐れをとて先かをおひて宮をしめたまひそんと祈りひゆるさ
いともかしこし往来の旅舩もし汁浴をそそぎおほゑし給
世人の傳る風景ね留るに似たりと座主の歌も作せる
むまへなる道し家に光明院忠信の深き境地をいかると

八景の名あるを聞つゐに所々其名を書添侍る
此度京師に於て其諸家の御相共遊の
限りなき和歌を詠したまひて皆金玉の章
なりぬ誠に他に類なき志なりし浪華より出て吾乃
寂りとせられ此義を願ひけるに八景のわりしと就書
記せ令せしむ速に書れいたさしめかくて毫を
筆を染侍るものなり

浪速西山氏
嘯林斎宗春

厳嶋明燈

灯かゝる春風や祢宜の袖　大聖院　僧正守詮

とぼし火よ浦にさし鳴の声　棚守　野坂元義

山も浜も灯籠に照る宮の外　上卿　三宅守行

秋なかつ星も採燈し火と宮宗　野坂林方

大元櫻花

大空もや花の時の市の坊　田　親継

名にはさくらも大すかれさくら絶　福田元廣

梅咲くや大みちかへる桜哉
　　　　　　　　　　松之坊
　　　　　　　　　　良言

佐保姫の袖まよ匂ふ桜かな
　　　　　　　　　　山崎生起

袖垣ハ今世の花の根さし哉
　　　　　　　　　　荒谷勝重

滝宮水蛍

蛍やほたるも生れ瀬の宮
　　　　　　　　　　田幸栄

水涼し蛍の登る瀬の丈
　　　　　　　　　　上御紀親

滝波のうきね蛍を尾花哉
　　　　　　　　　　一乗坊
　　　　　　　　　　成遍

京まちまちよ瀧の蛍かな
　　　　　　　　　　野坂以全

うたゝ人神ありて滝よ飛蛍
　　　　　　　　　　平野宗恩

鏡池秋月

沢の名を汚さぬ須月も鏡哉
　　　　　　　　　　三浦林昌

汲ひよあふ池水の月やまた鏡
　　　　　　　　　　祝師就親

傍とふ池ハ月のこのみかな
　　　　　　　　　　東泉坊
　　　　　　　　　　傳正

曇もまんと月も鏡の池の面
　　　　　　　　　　瀬良充常

てりそふハ月の鏡の池哉
　　　　　　　　　　二階常方

谷原欒鹿

鳴瀬のさゝ水も音せし涸川原　田重信

棹鹿の耳に澄るあり〳〵谷かゝり　村井守高

罡谷に星てらさる兼子哉　松之坊 守言

妻あめにたはしくや谷の薕鳴聲　児玉春仍

御笠濱鋪雪

雪はこれ御笠の濱の錦さよめ　熊野安旨

嫋ゑでゐたと夜に御笠の濱の雪　飯田富梢

ふりさもさそれ濱松の雪　華蔵院 良詮

来てみるや御笠の海の鋪雪　二階理峰

千代ゐや神のミてさけ海乃雪　西原政珎

有浦容船

舟止め雪ちらんもきれ浦千鳥　南波通春

船よ嫋子波の音聞うれ秋　熊野廣包

船子さく風急なこりや有れ浦　西方院 宥成

百嫋なや霞のそこふ深の浦　松井旨最

彌山神鴉

志ら由や苑ともまねく山鳥　祝師久品

雲を婦き嘉や神風山かくら　田 栄伸

ひらく芳をいさめよと神松　大願寺 海雅

志き信よりや神まれ山鳥　沙門恕信

安藝州嚴嶋八の撰京ハ志きを手とし文宗春くらしを
さるやるにかりてる老とはし然詩哥の道
ともなく集めて中ニ撰ひ川々書付とて

沙門恕信の選里なれハ兎毫もの作を取捨へと義
け事此時ニ人意を時々らハ神恩の冥慮にも
かなひぬるにや崇りさきの阿まり句を義て書
ら添く奥書致おれとかし

右嚴嶋連中奉納

攝津國難波
西山氏蟫庵
昌察

かゝる後今もりし出現　市杵嶋姫命此法座なしたまふ
安藝國嚴島ハ天下擁護海内安全の靈区なり御神徳の
威霊ますます仁慈深くおはしませは事あらため今更いふも
恐ろし、まして東京さへ遷座あるはかゝる拙き筆にての
せんハ中く浅くや侍らむ、されハいかに申へくもあらぬ大悲
人のかゝる此御名の言の葉数く、いか斗かとも人
ともいふへき事也今にいたり猶へさることそ尊くも
のかさりにて侍る也予東京詠の侍るにて縉紳家に

御進しても其御名ハ亦と称へられ侍りしに嚴淨法乃
社職相続予直源ハたやくも吾言うしの友なるを侍る事予か
念願の趣きも申してあまりに御先議の様なれハ人々と
おなしく風土宗相長の御事ニ参り詔して記し侍りし
かりハ相云ふも　神恩のたまる記事をとや取りしや否ん
座にも然き高まそれ以后も扱ひ侍りしをやなと念
老いる網の為に恐ひしハ求に与へし新たにハ京の
歌を纂て詠りぬ相云ふ歌と諸家ハ今に至る限りに

正徳五年仲夏の比詠歌も出来居深掌も相調しつゝ八
同年六月中三日恭しく
大以神の珍成広前に捧奉りぬ其外しる社祠神官
供僧内侍等上中下の男女にいたるまで其業の技芸人
大経神楽雑楽読経等の外万にいたるまで随
儀式をいとなみともにおほへ侍る様をやつかまつりさ
らなるものの根ざしをおこりて後おほせをなす事を
神のひ侍りし実を人気を人のかくまで事なり様をもひ人は

神盛の感通いならしかまさせまた有らんとおそ流しくも有
かたしけなく思ひ侍る六八の歌をたとへ成る心ざしをかたく
守る言の葉にのりて御まへを　大以神の広宝前に捧
奉て御法楽にせんにはおそれのなくもやいかなる広前に法
楽のうら字冠捧奉り給へん事を神の恵み侍るのみ　直条納まる和哥
をまさに書付侍る

巖嶌明燈

松の浦や風の峯も雲かゝりて見るればえぬる光

柏亭直條

いさく海士の小舟もほのゝ夜の星とやみれ杖の篝火

沙門恕信

大元櫻花

春いく代かをやはらかむ大きりと共神の庭おほふ花の白妙

直條

文こゝに海ふく風かるたえのいろ花乃色は桜もや川哉

恕信

滝宮水螢

神垣乃所には蔵る滝波夜るは螢乃影恵みなれして

直條

白糸の滝の白玉くれもさその袖かけてや蛍飛らん

恕信

鏡池秋月

やすらはぬひかりやうつる秋の月うつす鏡乃池かゝみにも

直條

秋の水そこもひかりもさやけき月は鏡の池にうつれる

恕信

谷原麋鹿

小男鹿のこゑもやあはれ谷川のはら萩よりも思ひ深き秋の夕風

直條

谷の原小萩の花の深く秋風にあはれさそふる小男鹿の声

恕信

御笠濱鋪雪

むらと舩出のさはりに浮流るゝみなと江湊の雪風ぞ吹

直條

海原やしくをくかへる波に立舩そ出る浦の白雪

恕信

有浦客舩

波の上を漕くもかへるもおさこゆる舩やいつの浦出る舩人

直條

須まの名残もいつか浦浪やともせる舩の出て行

恕信

弥山神鴉

鳴山乃神のむかし此も聞えし世をもいやしきなみの烏

直條

神代より流れしたえすその岩みね葉守る鳥いやしき

恕信

先年王御雲客厳島八景の詩歌奉納ありし末
清方遠きをなく禅師なる僧雅かり豊や清盛の意乃
篤成とて
大明神の跡乃廣前に奉るより
数く多し今般常に満ちて上梓てしぬそこれ
をも梓にちりばめ侍るは清盛奉納の志をしたひて
いへるもあらぬ事を入集せし風流の数多くこそ心や満し
清盛といふて松を九捨し侍らんは松と形と葉の茂し何とせ
これは
神垣は海の色まつていさその松の花の

那く筆に入集し侍る此内にハ愚詠をもし然
ちえ那き言葉拙作りぬたくひも有ぬへし見侍
人のいぶかりおもひ給ふ事多かりなん為学私なりぬを
りそのいにしへ侍るよし七寄りし

岩瀬氏